

冒険心が飛翔する“100人の戯空間”

ウイング フィールド

〒542-0083 大阪市中央区東心斎橋2-1-27 周防町ウイングス6F

TEL(06)6211-8427 FAX(06)6211-6312

ウイングフィールド公式サイト URL <http://www.wing-f.co.jp>

第8回むりやり堺筋線演劇祭参加 ウイングフィールド提携公演 **旅劇**
作／深津篤史 演出／はせひろいち (劇団ジャブジャブサーキット)

9/2(金) 7:30
3(土) 1:00

「カラカラ」

出演／コンプリ団

※各回終演後にアフターイベントあり

アフターイベントの詳細はコンプリ団のウェブサイトをご覧ください。

(<http://conburidan.blogspot.jp>)

料金／一般 2,500 円 U-22 1,500 円 (前売、当日共 U-22 は要証明証)

第 8 回むりやり堺筋線演劇祭参加 ウイングフィールド提携公演 **熟劇**
原作／鶴屋南北

脚本／くるみざわしん (光の領地) 演出・舞台美術／笠井友仁

7(水) 7:45 (猫)
8(木) 7:45 (鼠)
9(金) 7:15 (猫)
10(土) 2:15 (鼠)
6:15 (猫)
11(日) 11:15 (猫)
3:15 (鼠)

「四谷怪談」

出演／エイチエムビー・シアターカンパニー

猫組、鼠組のダブルキャストとなります。

料金／当 日 一般 3,500 円 25 歳以下・障がい者 3,000 円
予約割 一般 3,200 円 25 歳以下・障がい者 2,700 円
事前入金割 一般 2,500 円 25 歳以下・障がい者 2,000 円
猫・鼠セット事前入金割 一般 4,000 円 25 歳以下・障がい者 3,000 円
(事前入金チケットは 8 月 24 日 23 : 59 までの期間限定販売)

高校生以下 一律 500 円
(25 歳以下、障がい者、高校生以下は要証明証)

12(月) 休演日
13(火) 7:45 (鼠)
14(水) 7:45 (鼠)
15(木) 7:45 (猫)
16(金) 7:45 (鼠)
17(土) 2:15 (猫)
6:15 (鼠)
18(日) 11:15 (鼠)
3:15 (猫)
19(月) 11:15 (猫)
3:15 (鼠)
20(火) 1:15 (猫)
※ダブルキャストの出演者、各種チケット割引の詳細は
エイチエムビーシアター・カンパニーのウェブサイトをご覧ください。
(<http://www.hmp-theater.com>)

異・同分野交流サロン「月曜倶楽部」ウイングカップ7 前夜祭

26(月) 7:00 参加団体／ハコボレ、劇団演りだおれ、箱庭計画、劇団うんこなまず、
雲の劇団 雨蛙、無名劇団、MEHEM、
べろべろガンキョウ女、劇団祝人 (上演順) 料金／ 500 円

遠心、日々の背理

杉本 奈月

「あなたは演劇をやりなさい」と告げられて。149.5の取得単位を抱え、三月に、わたしは晴れて大学を退学した。一寸先は琵琶湖、京都への東の玄関口に構える薬学部の学舎、その離れに研究室を持つ恩師の言葉である。専門は分子細胞生物学、彼が教授のポストへ着任した 2013 年より、わたしは四年間の配属であった。

当時、さらには入学時に至っても「薬学の見地を持って演劇の創作をしていきたい」という、薬剤師の卵が揃えられた校内においては混入異物でしかない人間のわがままを、彼らは無碍にすることなく最後まで聞き入れた。誤差の範囲内として、二度もコンタミネーションを起こすような手のかかる学部生への煩わしさを計上したとしても、演劇を続けることにした選択も研究を続けないことにした選択も、彼の秤では同等の質量として目視されていたのだ。

日々の実験は戯曲の執筆と似ている。人知れず日の当たらない場所で行われる、途轍もなく孤独で地味で目立たない作業だ。サンプルの採取からデータを集積し、結果として脚光を浴びるまでは一銭の金にもならず、著作となるには相当の時間と費用と労働を伴う。どちらも片手間にして好い加減になせる代物ではないことを、彼は理解していた。

それでも、21 歳の冬。退学願いが受理されず、わたしは初めて自ら単位を放棄するという暴挙を

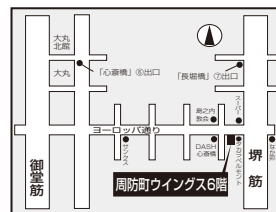
犯した。返却された直筆の署名よろしく、この場所を出ていきたがっている心を認めたのだ。冗談のようだった。不確かな行動の有意性を判断するべく、わたしは再び同じ過ちを繰り返した。幸か不幸か、そうしても退学させられることはなく、悪行を働いた回数だけ前年次へ留まるのみであった。留年学生であるという口実をもって、わたしは研究室を休むことを許され、出入りしなくなった。演劇活動と両立して過ごしていた、僅か三年の学生生活。厭世とは程遠く、個人が主体である未来の明るさを信じて疑わない学友たちを前に、わたしの平衡は失われていった。

24歳の春。早くも散りゆく桜とともに、国家試験の可否や就職、進級発表と、同じ春に入学した同期たちの目眩ような報せも舞い込んでいた。籍があるだけの三年を終え、わたしは変わらず劇作を続けている。2014年に『月並みにつぐ』～冷たい陽光・窒息するタバ・さめやらぬ覚醒～を、2016年に『居坐りのひ』を、「劇場の窓」から射す光はそのままにウイングフィールドにて三方客席を設え上演し、後者は 2015年に AAF 戯曲賞の最終候補作に残っていたのだ。

小劇場へ足を踏み入れるまでに、芸術大学や学生劇団を通過してこなかった出自を恥じることはなくとも、わたしは、あの日の眩暈を忘れずにはいられない。自室で埃を被りつつある専門書と六法、そしてノートの数々が、未だに、わたしの椅子の重しとなっている。前任の者の影が薄れた暗い南校舎の一室。空けられてもいない肌色のダンボールが身を横たえる夕方、まだ寂しい本棚を指差し、彼が薦めてくれた書籍は、わたしにとって重要な演劇書の一冊だ。

それから、半年が経とうとしている。今、わたしは 2017年 3月へ向け、前々作と前作に次ぐ『水平と婉曲』の創作に従事している。

(劇作家・演出家・N2 代表)



次代を担う表現活動を、微力ながら支援します。

す おう まち
周防町ウイングス